

「神の契約アイデンティティの回復」

イザヤ42：1～9

私たちの教会は「柔和と穏健」というタイトルで今年1年をスタートしました。昨年のテーマは「変遷と変貌」でした。変貌を完成させるために私たちに大切なことは、柔和に、穏健に進むことだと神様は言われています。そのためにイザヤ42：1～9は神の約束は何なのかを私たちに思い起こさせます。柔和に生きるための大事なプロセスとしてこの箇所を見ていきたいと思ひます。私たちは一つのものを見て、それぞれ見方が違います。だから神様は聖書というスタンダードを与えられました。私たちにはそれぞれ任されていることがあります。それをどう生かしていくのかは私たち次第です。生き方や判断の仕方が自分の方法だと神の道から離れてしまうことがあります。例えば自然を見て感動したとき、その中に神様が与えてくださっているメッセージを見出すことはとても大切です。

■ イエスキリストの預言 イザヤ42：1～3

1節はイエスキリストの誕生の預言です。ここに書かれてある「公義」とはいったい何でしょう。皆さんご存じの「暴れん坊將軍」は公義をもって悪に立ち向かっていきます。これを通して公義をみると、大きな問題を前に正義は力によって勝利するというイメージを持ちます。しかし2～3節を見るとこのような方法ではなく、「彼は叫ばず、声をあげず、またにその声を聞かせない(2節)」「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。(3節)」とあります。これは神様がこの世の中で解決をもたらす公義の方法を教えています。だから今年のテーマは柔和なのです。柔和という優しく微笑んでいるだけのようなイメージですが、ここで大切なのは、「いたんだ葦を折らず、くすぶる燈心を消さない」ということです。神様はいたんだ葦が折ってしまわず、もういちど元の群生のなかにもどして、本来の役割を果たさせようとするのです。神様は、問題を見て見ぬふりをしたのではなく、問題には根源があり問題の中でいちばん傷んでいるところに向いていて人を変えようとしたのです。その究極が十字架でした。人々の心のいちばん深いところにある罪を刀や剣で断ち切るのではなく、そこに燈をともしその人が自分の暗闇に気づけるようにされたのです。ここに本来の公義があるのです。私たちは、神様がされようとしている、私たちの人生のアイデンティティの回復ということをこの中から学んでいきたいのです。

■ 神の約束 イザヤ42：5～9

イエスキリストを信じる私たちに、神様は何を約束しているのでしょうか。「わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。(6節)」「こうして、見えない目を開き、囚人を牢獄から、やみの中に住む者を獄屋から連れ出す。(7節)」私たちが神を選んだのではなく神が私たちを選ばれました。それは、行って実を結びその実が実るためです。このように6～7節で言っています。私たちは今、実際に投獄されてはいませんが、誰かを恐れ、何かに怯え、誰かと比較し、どこかに行こうとするときに、本来は自分の居場所なのにその場所に行くことができない状況に自分を閉じ込めてしまおうとすることが、獄屋にあることだと聖書は言っています。そこにいる私たちの手を握り目を開かせるのだということです。今まで囚われていたことから私たちを解放し、見えなかった目を見るようにするために神様は私たちを選んだのです。人生の中で、荒れ地に置かれ目が見えなくなっている、また、何かに囚われてしまうようなことが起こるのですが、私たちが祈ることに心を向けるとき、忍耐をもって神の知恵を見出したとき、神は荒野に道を荒れ地に川を与えてくださるのです。だから私たちは、9節に書かれているように「新しいことを私は告げよう」と神様が言われたとき聞くことができるのです。このように言われているのに私たちが聞こうとしないことは、とてももったいないことです。

■ ダビデとヨナタン

ダビデとサウル王の息子ヨナタンは友人として愛し合い非常によい関係でした。しかしサウル王はダビデを憎みました。ヨナタンは、サウル王との親子関係とダビデとの友情関係の狭間にありましたが、友情を選びます。父を裏切ることになるけれどダビデを逃がします。そのときダビデとヨナタンは友情の約束をします。ヨナタンはダビデに言いました。「私は死ぬかもしれない。でも、ダビデあなたが王になっても、私の子供たちのことを必ず覚えておいてくれ。」その後ダビデは王になりました。王になってもダビデはいつも神の前にへりくだった者でした。第2サムエル7章にはこうあります。ダビデは神に対して

家を建てようとし、神はそれをとても喜んでダビデのことを評価します。そのときダビデは「私が何者だというのでここまであなたは私を導いてくださったのですか。」と言いました。

そのダビデが、第2サムエル9章で突然ヨナタンとの約束を思い出します。サウルの家は滅んだが、ヨナタンの子たちはどうなったのだろう、と。そしてヨナタンの息子メフィボシェが生きていて荒野にある家にかくまわれて過ごしていることがわかりました。その彼がダビデの前に呼ばれたときダビデは言いました。「恐れることはない。私はあなたの父ヨナタンのためにあなたに恵みを施したい。あなたの祖父サウルの地所を全部あなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をしてよい。(第2サムエル9章7節)」これに対しヨナタンはこう言いました。「このしもべが何者だと言うのであなたはこの死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。(第2サムエル9章8節)」

ダビデとメフィボシェは同じことを言いました。この話は、後に、目が見えるようになった私たちが、王であるイエスキリストに招かれて、再び神の子として自由に出入りでき、失っていたものを取り返し、食卓に招かれるという黙示録の預言のひな形として、実際の話が繰り返されているのです。とても大事で意味深いところ。なぜこの二人は、同じことばを語れたのでしょうか。どちらも不毛の地に追いやりられ、自分にはもう今までの栄光はないんだ、自分はちりあくだと、自分を否定したそんな人に神様が契約を果たすのだということです。

今日、神様はこのイザヤ書から何を語りたのでしょうか。もし私たちが自分の心の中にある暗闇を認めて、痛みの中にあつたことを神様の前に怒りとしてではなく悲しみとして受け止めたとき、神様は私たちの心に変化をもたらします。メフィボシェは自分の父を奪い取ったダビデに、自分はいもべだ、犬だと言って伝えることができた姿が、練られた品性であり、知恵なのです。人生の中でもうどうにもならないという痛みを通ったときに、はじめて神様が手を取って引き上げてくださり、神様の前で「なぜこんな私を」と思えたとき神様による練られた品性を受け取ることができるのです。この神の奇跡がイザヤ書の預言なのです。痛みの中を通るとき、世の中ではそれは悲劇だけれど、ダビデは「苦しみに遭うことは幸いでした。なぜならその中でかみの摂理を学んだからである。」と祈りました。私たちがもこのように祈りたいのです。「神様、なぜ私は今この場所にいるのですか。」すると神様は、「あなたが失っていた地所を全て返す。そしてあなたができなくなっていたことをもう一度、復活させる。だからあなたは自由にこの場所に入出入りしてよいのだ。」と言われます。今年1年間、私たちは神様の前に進んでいくのです。どうせ進むなら神様が私たちの心を照らそうとしているのを知って、本当の気持ちで神様の前にその悲しみ、屈辱、わだかまりを心を開いて祈ってほしいと思います。

■ 手塚治虫

漫画家手塚治虫が「ブラックジャック」にかけた情熱をみてみましょう。その原稿が出版社にだされ9割の印刷が終わった頃、手塚治虫は「自分の思いとちよつと違うところがあるから原稿を返してくれ。」と言ったことがあるそうです。9割も印刷が終わっているのですからそれは大変なことですが、原稿は返されました。手塚治虫は、ある場面に葉っぱをたった3枚付け加え、「よし！これでいい！私はこの作品を愛している。だからほんの少しでも違つてはいけなないのだ。」と言ったそうです。こんな風に、私たちが造つた神様は、どんなことをしても造られたときの元の姿にもどすのです。私たちの人生に関わり、アイデンティティを回復しほんの少しのズレさえも戻したいのです。

■ 最後に

神様は私たちが完璧に造られたのに、多くのズレが生じてしまいます。しかし神様は、それを見過ごさず、諦めず、回復をもたらします。そのために私たちが訓練にあわすことがあります。全てを失うはずだった私たちの人生ですが、神様は私たちを探し出し、連れてきて食卓につかせ、自由に出入りしてよいと受け入れてくださいます。主はあまねく全地を見渡し、私たちを探し出し、心が一つになるときに力を現わし奇跡を行なうことができるお方です。信じて一歩踏み出し扉を開けたときに起こる神の奇跡です。私たちに神様が無条件で与えてくださった賜物があります。タラントです。私たちがそれを埋めてしまつてはいけません。それを忍耐をもって、神の知恵をもって用いることができますように。神様は決して私たちを見捨てません。ですから神様が与えてくださる計画を、恵みを、十字架の力を、心を開いて受け取っていきましょう。

(要約者：秋山 恭子)

(2025年1月26日)